

学級・ホームルーム担任のための

教育相談 第16集

人間関係を築く力を育てるために

栃木県総合教育センター

ま え が き

少子高齢化社会や情報化社会の中で、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化しています。そして、子どもたちには、人間関係を構築する力や社会性が育ちにくくなってきていると言われています。

人と付き合うのが苦手な子どもたちの背景には、どのようなことがあるのでしょうか。また、人間関係を築いていける力は、どのように育てていったらよいのでしょうか。

本冊子は、子どもたちが人間関係を築く力を育てていくための教師のかかわり方を、具体的な場面を取り上げながらまとめたものです。

これまでに、当センターでは「学級・ホームルーム担任のための教育相談」として、いじめの問題をはじめとして、不登校の問題、リストカットの問題、キレる子の問題などを取り上げてきましたが、それらはすべて人間関係の問題が背景にあると言っても過言ではありません。また、ひきこもりの若者たちの問題も大きな社会問題となっていますが、これもやはり人間関係の問題であると言えると思います。

人間関係を築くための教師のかかわり方をまとめたこの小冊子が、先生方が児童生徒と接する際に、参考になることを願っております。

平成20年3月

栃木県総合教育センター所長

五味田 謙 一

目 次

まえがき

1	人間関係を築く力とは何か	1
	(1) 人間関係が苦手な子どもたち	1
	(2) 人間関係とはどのようなものか	1
	(3) 人間関係が苦手になってきた背景	1
	(4) 人間関係を築く力を育てるためには	2
2	学校で人間関係を築く力を育てるために	4
3	かかわりのポイント	5
	(1) 子どもが話しやすくなるかかわり	6
	(2) 子どもの気持ちを受け止めたかかわり	8
	(3) 子どもが安心して応答できるかかわり	10
	(4) 子どもの心にあるものを見つける手助けをするかかわり	12
	(5) 子どもが納得いくかかわり	14
	(6) 子どもを認め、励ますかかわり	16
4	まとめ	18
	引用・参考文献等	20
	教育相談部発行資料	20

あとながき

1 人間関係を築く力とは何か

(1) 人間関係が苦手な子どもたち

現代は、人間関係が苦手な人が多くなってきているように感じられます。また、それぞれが「孤立化」してきているような感じも受けます。

子どもたちのことを考えてみても、集団活動が苦手、うまくグループの話題の中に入っていくけない、休み時間や自由な時間が苦手といったように、他の子どもたちと付き合うのが苦手という問題が増えてきているようです。また、そうした子どもたちが自由に自分の気持ちや意思を表現できずに、自分を抑えたり、無理にひょうきんな態度を取ったりすることがあります。そして、疲れてしまって、やがて不登校やひきこもり、リストカットなどの自傷行為、また逆にキレるというような行為につながってしまうようなこともあります。

また、今、子どもたちの間では「ウザイ」「ムカつく」「キモイ」などという言葉がよく使われています。さらに今年は「KY（空気が読めない）」という言葉も流行しています。こうした言葉はいじめの問題にもつながっており、やはり現代の子どもたちにとって人間関係が苦手なものになってきているということをよく表しています。

それでは、人間関係とはどのようなものなのでしょう。また、どうして人間関係が苦手な人が増えてきているのでしょうか。さらに、人間関係を築く力とはどのようなものなのでしょう。

(2) 人間関係とはどのようなものか

一般的に「人間関係」と聞いた時には、私たちはどのようなものを考えるのでしょうか。例えば、職場の人間関係や地域における人間関係、親子の人間関係、恋人との人間関係などを思い浮かべる人もいます。また、子どもであれば級友、大人なら同僚のような人間関係を考える人や、先輩と後輩、上司と部下のような人間関係を考える人もいるかもしれません。さら

に、「教える人と教わる人」や「治療する人とされる人」、「世話をする人とされる人」のような人間関係も考えられます。

とにかく、私たちは、ありとあらゆる人間関係の中で生活しており、また、その人間関係で悩み、人間関係は難しいと感じているのです。

ここで改めて人間というものを考えてみると、人間にとって一番大切なことは自分が生きていくということです。しかし、それは他の人も同じです。そして、時にその利害が一致せず、摩擦が生じることがあります。自分のことだけを考えて行動していたら二者の関係は成り立ちませんし、さらに大きくは「社会」というものも成り立ちません。人間関係とは、二人以上の人間の間にも生まれる関係であり、お互いに思っていることや言いたいことがきちんとと言って、相互に分り合える関係を目指すこととなります。そして、そのためには、お互いに我慢をしたり、譲ったりということが必要になります。「せめぎあって、折りあって、お互いさま」(富田,2001)という人間関係を身につけなければならないのです。人間関係とは、実は人間が社会生活を営んでいく上で最も基本的な部分にある大切なものなのです。

(3) 人間関係が苦手になってきた背景

現代においてはどうして人間関係を築くことが難しくなってきたのでしょうか。以下に、その背景を考えてみます。

ア 家族関係の変化

人間関係の基本は家族の中で育まれます。乳児期に、泣き声だけで母親などの養育者から自分の気持ちや要求を分かってもらって、全面的に受け入れてもらえることが「基本的信頼感」の獲得につながるとされています。それは「安心感」であり、人間関係のベースになるものです。そして、さらに自己肯定感の獲得にもつながっていくものなのです。現代は、様々な状況から、こうした安定した関係を築くことが難しくなってきていると考えられます。

また、かつては兄弟姉妹間のけんかななどを

通して体験的に身につけてきたはずの、相手（他者）のことを考えて我慢したり譲ったりすることや、人間関係を調整したりすることも苦手になってきています。

イ 仲間関係の変化

仲間同士の集団体験が不足していることも、人間関係を築く力を身につけることが難しくなった背景の一つとして考えられます。かつて「サンマ（3間）がなくなった」と言われたことがあったそうですが、子どもたちに、遊ぶ「時間」と「空間」と「仲間」がなくなると、仲間関係を通して体験的に学習されてきた人間関係が構築できなくなったということです。

友人関係の発達も、従来「ギャンググループ」（同一の行動をとる仲間関係）から「チャムグループ」（話題を共有する仲間）へ、そして本来の仲間である「ピアグループ」（お互いの違いを認め合った仲間）へと発達・変化していくと言われていましたが、今その発達は遅延ないし停滞しているとも言われます。そして、子どもたちの「集団を作る力」も弱くなり、大きなサイズの集団は作れず、小集団がやっと作れるといったようなことになっているのです。

このように仲間関係が変化したことも、我慢や耐性、調整力などが身につけにくくなってきていることの大きな原因と考えられます。

ウ 地域の変化

隣近所同士も結びつきが弱くなり、お互いに干渉しないという雰囲気があり、家族が孤立化してきているというような変化も見られます。

また、地域の結びつきも弱くなり、地域社会全体で子どもたちを育てていく地域コミュニティも成立しにくくなってきています。

地域で子どもたちが集まる機会も減少しています。子どもたちは、地域社会の中で様々な年齢層の大人や子どもたちとかわるることにより、多様な人間関係の在り方を体験的に学んできたはずなのですが、それができにく

くなっているのです。

エ 社会の変化

急速に豊かな社会に向かって進み、その結果生まれてきた大量消費文化の中では、何でもすぐには買ってもらえるようになり、我慢や耐性を身につけることが難しくなってきています。

さらに、人間関係を築く力が育たない背景としては、情報化社会、ネット社会の影響が考えられます。確かに便利で効率の良い社会になってきました。しかし、その反面、こうした社会では、様々な情報が氾濫することになり、また誹謗中傷も横行し、他者を信じることができにくくなってしまいます。

情報のスピード化は、子どもたちのみならず、大人たちにも、常に何かせかされるような感覚をもたらします。皆、心の余裕が持たなくなり、じっくりと自分で考えて行動することや、自分の悩みを自分で引き受けてゆっくり考えるということができなくなってしまいます。そのことは当然人間関係の在り方にも影響して、自分と相手の在り方を大切にしたい関係を育むことができなくなってしまいます。

さらに、ネット社会は、家の中に居ながらにして他者との交流が可能であるということにもなり、ひきこもりやすくなるという側面も考えられています。遊びがTVゲームを中心にしたものになっていることも人間関係を学ぶ機会を奪っていると考えられます。

このことも含めて、様々な背景から人間関係で傷つきたくない、嫌われたくない、人にどう思われるかが常に気になるというように、人間関係に「臆病」になってしまうことや、際限なく他者に攻撃的になってしまうことなども生じていると考えられます。つまり、基本的に現代社会の中では、安心した関係が築きにくくなっているのです。

(4) 人間関係を築く力を育てるためには

例えば「言っても仕方がない」「どうせ言っても聞いてもらえない」「言っても怒られるか説教されるだけ」「言っても変わらない」「言

うのが怖い」「言ったら嫌われる」「言ったら心配をかける」などと考えて表現しない（できない）というような場合を考えてみます。こうした場合は、信頼関係が築けていない、あるいは人間関係が悪化しているということです。相手から受け入れられているという思いがあれば信頼関係ができるので、このような気持ちにはなりません。

こうしたことを考えると、やはり「ほめられる」「認められる」「感謝される」などの経験を通して、相手から受け入れられているという思いを抱けて、相手との間に信頼関係が築けることが基本になります。そして、そうした積み重ねが自己肯定感にもつながっていくのです。

大人は常日ごろからのかかわり方を通して、子どもたちとの間に信頼関係を築き、子どもたちが安心して、自分の思いを表現でき、表現方法も学び、子どもたち同士でもよい人間関係が築けるように援助していくことが最も大切なことです。

それでは、問題を未然に防ぐためには、また、よりよい人間関係を築いていくためには、どのような力を育てていったらよいのでしょうか。

以下に、人間関係を築いていくのに大切だと考えられる力について述べていきます。

ア 自己を肯定できる力

自分自身をある程度肯定的にとらえることができないと人間関係もうまくいかないものです。では、自己を肯定できるためにはどのようなことが必要なのでしょう。

それには先に述べたように、相手（他者）から受け入れられていると感じていることが必要です。他者から受け入れられることは自分自身を受け入れることや自己を肯定的にとらえることにつながっていきます。そして、他の人から受け入れられていると感じることができるほど自分で自分を受け入れることができると言われていきます。すなわちこれが自己肯定感が高いということになるのです。

イ「感情」に気づく力

現代は、子ども自身が自分の「感情」をは

っきりとは自覚できなくなっているという問題があります。特にそれは自分自身の感情を抑圧してしまったりする傾向の強い「よい子」と「被虐待児」に見られます。ここには、相手から受け入れられているという安心した人間関係がありません。そして、子どもたちの感情がうまく育たなくなっているのです。これはまた、相手の感情を適切に理解できないという問題にも関係してきます。

そういったことから、安心できる関係をつくり、その中で大人がゆっくりと子どもの気持ちを言語化してあげることが有効だと考えられます。

ウ 表現する力

相手から受け入れられていると感じ、よい人間関係ができ、「感情」に気づいたとしても、それを適切に表現する能力が乏しいと、相手に対してうまく伝わりません。大人は、子どもとかかわる中で、子どもの気持ちを察して、それを言語化してあげたり、相手にどのように言ったらいいかを教えたりして、子どもに表現の仕方を伝えていくように手伝います。また、上で述べたようなことを日常の学校場面で行うものとして、アサーション・トレーニングやソーシャル・スキル・トレーニングなどがあります。

エ 自己をコントロールする力

人間関係を築いていくためには、自分自身の感情や行動を調整（コントロール）できる力も必要です。衝動的に行動せずに「我慢」ができれば、「キレル」というような、人間関係を破壊してしまいかねない行動を防ぐことができます。また、自分自身のストレスに適切に対処できる力や方法の学習も大切です。

大人が子どもの話によく耳を傾けて聴き、その気持ちを分かってあげると子どもの怒りや悔しさなども少し治まっていきます。また、対処方法も一緒に考えていけると、子ども自身が自分の行動をコントロールできるようになり、よりよい人間関係が築けるようになっていきます。

オ「聞く」力

人間関係を築くためには、自分の側からきちんと「発信」できる力だけでなく、相手の感情や言いたいことなどをきちんと理解できるという「受信」できる力も必要となります。先入観や思い込みで理解せずに、はっきりしない時や分からない時には相手に確かめるということをすればズレが生じないで済みます。

さらに最後まで話し合っているかどうかということも考える必要があります。もしかすると、話を打ち切ってしまうてはいないか、また、相手に「言えない」「言いたくない」という思いを抱かせていないかなどを考えてみる必要があります。

こうしたことを、子どもとのかかわりの中で気づかせてあげられるようなかかわりも大切です。

人間関係の基本とは、やはり相手の考えや気持ちをしっかりと受け止め、自分の考えや気持ちもきちんと表現し、その一致点や相違点を考え、やりとりしていくことなのです。そのために大切なことは、やはり信頼関係とそこから生まれる安心感なのです。

2 学校で人間関係を築く力を育てるために

学校は、子どもたち一人一人がそれぞれの特性を生かしながら、集団や社会の中で自己実現できるような資質や能力・態度を習得させ、それらを発達させていくという役割を担っています。その中で、今課題となっているのは、友達が作れなかったり、友達の中に入っていけないなど、人とうまくかわれなかったり、人間関係を築けなかったりする子どもが増えてきたことです。これをどのように改善し、望ましい人間関係をつくっていくかを考える時、人とのかかわりを学ぶ場として、学校の果たす役割は大きいといえます。

人間関係を築く基盤にあるのは信頼関係です。そしてそれは教師と子ども、子ども同士のかかわりを通して築かれていくものです。まず教師が、

一人一人がかけがえのない存在であるという認識をもち、一人一人のよさを認めながら子どもとかわっていくことが大切になります。教師がモデルになり、子どもの理解を深めると共に、子どもたちに温かい言葉をかけていくことで、子どもたちは、お互いに友達へのかかわり方を学び、少しずつ人間関係を築く力を育てていくのです。

それでは、教師はどのように子どもにかかわっていったらよいのでしょうか、また、人間関係を築く力を育てるためには、どのように子どもたちの中に介入し、子ども同士の人間関係を調整していったらよいのでしょうか。それには、まず子どもが何を伝えようとしているのかを教師が理解しようとすることです。そして子どもの話をどう理解していくかということを一方で考えつつ、自分が今何を感じ、何を伝えたいのか、この場で何を言うことがふさわしいのかを考えて、子どもとかわっていくことです。これは、すべての子どもに対して、今頑張っていること、また今まで頑張ってきたことや努力を言葉に出して具体的に褒めたり、励ましたりすることであり、これによって、子どもはより自信をもつことができます。

また、子ども自身が自分のがんばってきたことを子ども同士で話し合ったり、クラスみんなに話したりすることによって、自分の話を友人に聞いてもらえたという満足感を得ることができます。そして、聞いてもらった後の友人からの温かな言葉は、子どもにとっては喜びとなり、励みになったり、自信になったりします。

教師が子どもをどう認めていくか、また子ども同士の喜び合い、励まし合う関係をどう育てていくかが、人間関係を築く上で大切になってくるわけです。以下にそのポイントをあげます。

① 子どもが話しやすいようにする

「聞いていますよ」というメッセージを言葉や態度に込めて返していくと、子どもは安心して話せるようになります。

② 子どもの気持ちを受け止めていく

子どもの話を一方的に「批判」したり、「評価」したり、さらには「忠告」したりせず、子どもの気持ちを受け止め、また、それに対する自分

の気持ちを素直に子どもに伝えていくと、子どもは自分の気持ちを分かってもらえたと感じ、自分の言葉で表現できるようになります。

③ 子どもが安心して応答できるように、気持ちを押し量る

原因を追求したり、非難したり、あるいはすぐに解答を求めたりしようとせず、子どもの置かれている状況を押し量りながら、問いかけたり、じっくり待ったりすることによって、子どもは安心して話せるようになります。

④ 子ども心の中心にあるものを見つける手助けをする

子どもが何をしたらよいのか解決の糸口がつかめず困っている時に、子どもを責めたりするのではなく、相手に寄り添い、具体的な質問をしながら一緒に解決策を考えていくと、子どもの心の中が少しずつ整理され、解決の糸口が見つけられるようになります。

⑤ 子どもが納得いくように話す

子どもが好ましくない行動や態度をとった時

には、子どもの話を聞かずに注意や叱責、禁止などをしがちです。しかし、子どもは注意されたことを、一応その時だけは受け取りますが、心から納得しない限りは、反抗的な態度を示したり、同じ失敗を繰り返したりします。子どもが納得するように、心に働きかけていくと、子どもの行動が変わっていきます。

⑥ 子どもを認め、励ます

子どものよいところや努力してきたこと、また子どもが重ねてきた事実などを認め、励ましていくことで、子どもは自己肯定感が高まり、意欲が出てきます。

3 かかわりのポイント

それでは、学校で教師が子どもとかかわる具体的な場面を中心にして、人間関係を築く力を育てるためのかかわり方について述べていきます。以下にかかわりのポイントの見方を示します。

(1)～(6) かかわりのポイント

○ 教師が子どもにかかわることで育つ力

教師と子どもとの間でありがちな会話

教師の言葉かけ

子どものつぶやき、言葉



かかわりのポイント

- 教師が子どもとかかわっていく上でのポイントの説明
- 子ども同士の間関係がどのよう調整していくかの説明

事例（概要）

◇子どもの気持ちに寄り添ったかかわり例

A男：

先生：

A男：

先生：

事例におけるかかわりのポイント

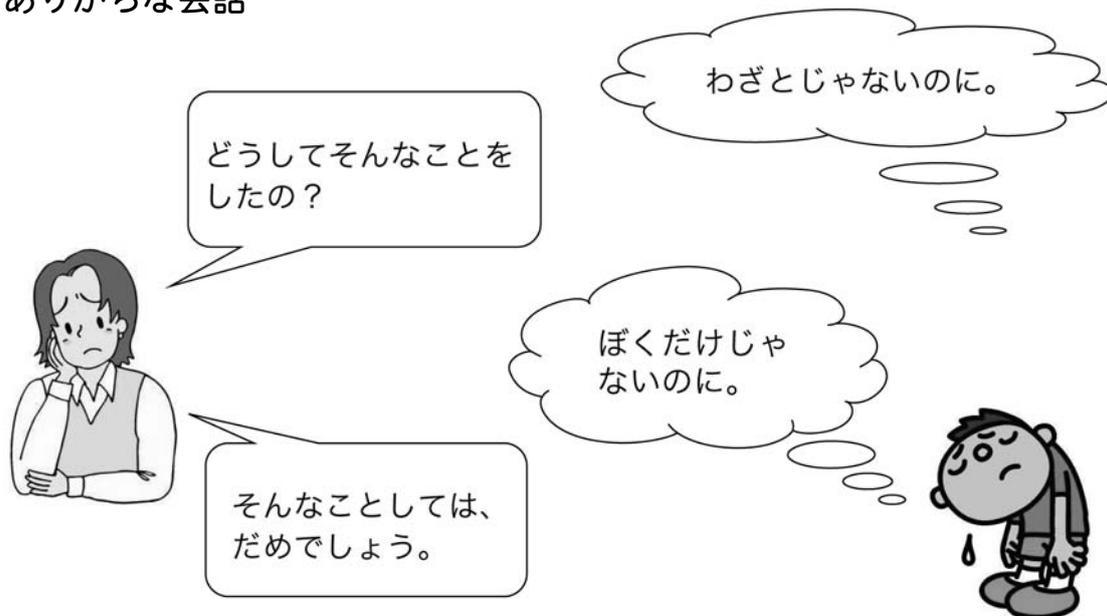
- 子どもの言動を教師がどのように受け止め子どもに返していくか
- 子ども同士の間関係がつかれるようにするために、どのように教師が介入していくか



(1) 子どもが話しやすくなるかわり

子どもは話してみようという気持ちを抱くことができる

ありがちな会話



かわりのポイント

「話しやすい」と感じるのは、温かい雰囲気、よく話を聴いてくれたと感じる時です。そのためには、まず心から相手の話に耳を傾けることが大切です。

その子に対する先入観などで「～に違いない」と決めつけて話を聞いていると、素直にその子の思いを受け取れなくなってしまいます。

教師が子どもの話を聞く時の態度としては、①今、自分のしていることをやめる②相手に体を向ける③最後まで話を聞くことが必要です。また、「あなたの話を聞いていますよ」というメッセージになるように、声の大きさ、高さ、顔の表情、タイミングなどに気をつけて相づちを打ったり、うなずいたりすることも大切です。

そして、子どもの話を聴いて、わかったことを「あなたは～と思っているんだね」と返してあげると、子どもは、さらに話しやすくなります。

「自分のことをわかってくれた」「わかろうとして、一生懸命に話を聴いてくれていた」と感じた時に、子どもは安心感を持ち、「もっと話してみよう」という気持ちを抱くこととなります。このことは、人間関係を築いていく上での基本となります。

事例

小学校3年 女子 宿題を忘れてしまったことを先生に話す場面

A子：先生、宿題忘れしました。

先生：あら、最近気をつけていたのに、どうかしたの。

A子：昨日、ちゃんとやったのに。たぶん、家の机の上だと思うんだけど。

先生：ちゃんとやったのに残念だったね。明日、忘れずに持ってこられますか。

A子：はい。絶対忘れない。

先生：それじゃ、明日まで待ってるね。忘れないように連絡帳に書いておいてね。

事例におけるかかわりのポイント

いつも忘れ物が多いA子は、最近、先生やお母さんと忘れ物をしないという約束をして、少しずつ忘れ物をしないように気をつけるようになってきました。しかし、今日は、宿題をやったのに、家の机の上に置いてきてしまいました。そのことを先生に伝える場面です。

今まで忘れ物が多かったA子が、宿題を忘れたとなると「また忘れた」という思いが頭をもたげてきます。その時に、「また」などと言ってしまうと、「先生はやっぱり私をそう見ているんだ」という気持ちになります。それでは、せっかく忘れ物をなくそうと頑張っているA子は、頑張る意欲さえなくしてしまいかねません。そこで、先生は今までの努力を認めるとともに、宿題を忘れた理由をA子に聞いています。

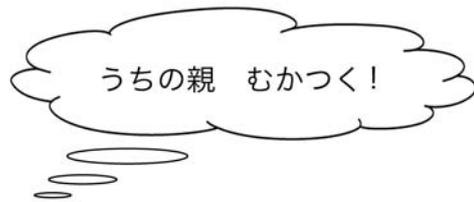
A子の言葉を信じて、まず最後まで話を聴いていくことが大切です。そして、さらに今まで頑張ってきた様子を認めていることを伝えることで、今日は失敗したけど、明日は気をつけようとA子が思うようになっていくのです。



(2) 子どもの気持ちを受け止めたかかわり

子どもは自分の気持ちを言葉で表現できるようになる

ありがちな会話



親のことをそんな風に言う
もんじゃない!



もう部活やめちゃ
おうかなあ。

すぐにあきらめるのは
よくないよ。

かかわりのポイント

子どもの不平や不満に対して、教師は子どもの話をじっくり聞く前に「そんなことはよくない」「こうした方がいい」などと批判や忠告をしてしまうことがあります。この時には、教師の価値観や社会通念から子どもを見ていることが多いものです。教師からこのようなことを押し付けられると、子どもは「気持ちをわかってもらえない」と心を閉ざしてしまうことになりかねません。

教師が自分の考えを先に言わないで、まず子どもの目線でその状況を捉えてみれば、子どもを尊重したかかわりができるようになります。まずは子どもの気持ちを受け止めることです。そして、「ああ、そう思うんだね」とか「それで嫌になってしまったんだね」と受け止めた気持ちを素直に子どもに伝えていきます。その上でどうしたらよいかを一緒に考えようとしてかかわれば、子どもは気持ちを出しやすくなり、前向きに考えていくことができるようになります。その際には、教師は一方的に気持ちを伝えるのではなく、お互いの意図することを理解し合えるように、子どもと考えや気持ちのやりとりをしていくことが大切です。

このようなかかわり続けることで、子どもは自分の気持ちや考えを言葉にして表現し、人とのつながりをつくっていきこうという意欲が高まるのです。

事例

高等学校1年 女子 面談で母親に対する不満を訴える場面

A子：もう、うちの母親むかつくんですよ。

先生：どうして。

A子：だってわたしの話を全然信用してくれないんです。この間、部活をやって帰ったら遅くなっちゃったんですけど、「またどこかで遊んできたんでしょう」と言って、いくら説明しても聞いてくれないんです。

先生：そうだったんだ。

A子：確かに、1学期の頃は部活をやめようかなと思っていて、中学校の友達と遊んでばかりいたから。でも、今は3年生までは続けようと本気で思っているんですよ。

先生：しっかりと考えているんだね。一生懸命やり始めたのに、信じてもらえてないと思ったのかな。

A子：そうなんです。だからもう親とは話したくない。

先生：今、話してくれたこと、お母さんに伝えたことあるかな。

A子：どうせ言っても聞いてくれないから言ってもせん。

先生：親はあなたがしっかり考えていることを知らないから、前のように心配しているんじゃないかな。誤解している面もあるかもしれないね。

A子：それもありません。じゃあ、少し話してみようかな。

事例におけるかわりのポイント

教師は、1学期の頃のA子の状況を知っていると、今の本人の状況をよく見ようとせずに「そういう時期もあったから、親がそう言うのも仕方ない」と判断したり、親と会話をしていないことを「それはよくないよ」などと批判したりしてしまいます。

この例では、そこに触れずに、まずは「むかついている」理由を聞いたり、信じてもらえていないと感じているA子の気持ちを受け止めたりしています。それによってA子は、自分の気持ちをわかってもらえた、という安心感を得ています。また、教師とのやりとりの中で、自分で思っていることを人に伝えればわかってもらえるのかもしれない、ということを経験しています。そして、A子は母親に対しても「じゃあ、少し話してみようかな」と自分で次のことを考えていけるようになっていきます。

このように、気持ちを受け止めたかわりは、教師側から意見を押しつけないので、子どもは自発的に自分を見つめることができ、気づいた自分の気持ちを言葉で表現しやすくなっていきます。

(3) 子どもが安心して応答できるかわり

子どもは安心して話せるようになる

ありがちな会話

どうしてきちんと
歌わないの？

… (うるさいなあ)

… (そう言われても)

なぜ、だまっているの？



かわりのポイント

子どもに「なぜ？」「どうして？」と、問いかける場面があります。それらの言葉は、原因を追求したり、相手を非難したりする時に使われがちです。これは、話したいことも話せない状況に子どもを追い込んでいくことになります。子どもにとっては『『どうして』と聞かれても困る。何と言ったらいいのかわからない』というのが正直なところで、そのために黙ってしまうことも多いものです。しかも、何度も繰り返されると、早くこの場を去りたくなる気持ちと共に、「もう何を言ってもだめだ」と心を閉ざすことになるのです。ですから子どもが、自分の考えや気持ちを素直に表現できるようなかかわりをするのが大切です。相手がどのような気持ちでいるのかを考えながら、「何かあったの？」と具体的に問いかけることで、子どもが答えやすくなるものです。

また、どうして黙っているのかを考えることも大切です。子どもが黙っている時に、教師は「こういうことかな」と気持ちを押し量ったり、待ってあげたり、また、「あとからでもいいよ」「あとで話そうね」というメッセージを送ったりすると、子どもは安心して考えることができます。つまり沈黙を大事にし、じっくりと答えを待つという姿勢は、子どもに安心感を与えることになるのです。

子どもの気持ちを押し量りながら、温かな言葉をかけることで、安心して話せるようになると共に、子ども自身も肯定的に考えられるようになります。自分を肯定的にとらえることができるようになると、子どもは落ち着き、積極的になり、前向きに取り組めるようになります。

事例

小学校5年 女子 音楽の時間、いつもと様子が違う場面

(授業中)

先生：A子さん、どうしたの。

A子：…。

先生：何かあったの。

A子：うーん…。

(次の休み時間)

先生：A子さん、どうかしたの。

いつもはみんなと歌っているのに、今日は元気がないから何かあったのかなって思ったんだよ。もしよかったら、話してくれないかな。

A子：今朝、お母さんに怒られちゃって…。

先生：そうだったんだ。

A子：歌う気持ちになれなくて…。

先生：そう。朝から気になっていたんだね。

A子：はい。

先生：気になっているようだったら、少し話そうか。

事例におけるかかわりのポイント

授業中、みんなと同じようにやらない子がいると、教師はなぜやらないのかという思いで、何とかしようと焦ってしまいがちです。子どもに「なぜ?」「どうして?」と理由を追求することは、子どもをせかし追い込んでいくこととなります。教師は、子どもがいつもと様子が違う時は、すぐに叱るのではなく、「何かあったのだろう」と考え、肯定的に受け止めていくことが必要です。

この場面では、子どもの様子がいつもと違うと感じ、「何かあったのだろう」と、まず子どもの気持ちを考え、声をかけています。そして、休み時間になってから、話を聞いています。もしかしたら休み時間に友達とトラブルがあったのかもしれない、家で親に叱られて登校したのかもしれない、あるいは何か心配なことがあるのかもしれないなど、教師が子どもの困っていることを予想し、話を聞いています。気持ちを受け止めてもらったことによって、子どもは少しほっとします。

そして、教師から「気になっているなら、話そうか」と提案して、子どもの悩みを理解しようとしています。教師がじっくりかかわっていくことで、クラスの他の子どもたちも、温かい気持ちで待つことができるようになるものです。このように、教師がその子の気持ちを推し量ったかかわりをしていくことで、教師と子どもが理解し合ってコミュニケーションをとれるようになり、子どもも肯定的に受け止めてもらえたと感じ、安心して話せるようになります。

(4) 子どもの心にあるものを見つける手助けをするかかわり

子どもは心の中を整理することができる

ありがちな会話



最近、何にもやる気がしない。

そんなに無気力で
どうする！



数学がわから
ない！全部！

全部ってことないで
しょ。もっとがんば
りなさい。



かかわりのポイント

子どもが「～ができない」と言う時は、言葉の裏側に「少しでもできるようになりたい」「できるようにしなくては」という気持ちが隠れていることが多いものです。この本心に近づくためには、まずは、できなくて嫌になってしまっている子どもの気持ちにしっかりと寄り添って話を聞いていくことが大切です。そうすると、子ども自身が自分の心の奥底にある気持ちや考えに自然と気づいていきます。また、冷静に事実を確認し、「できるものもある」とか「できた時もある」などと例外的にうまくいっていることに目を向けさせるようにします。そして、「できる時は、できない時とどんなことが違うのかな」と問いかけ、少しでも改善できるための条件を探していきます。そうすることで、できないことを気にするということから、できるための条件を整えていく努力をするという方向に視点を変えることができます。このかかわりの根底には「子どもにはやれる力がある」と信じる姿勢があります。子どもが実践してみたら、その後も言葉をかけ、少しでも成功していたらその努力を認めます。

このように、子どもの本心を大切にしながら、解決の糸口を見つけていくかかわりによって、子どもは心の中にある感情や考え、自分の可能性に気づき、今持っている力をうまく行動につなげる体験をすることができます。

心の中を整理することは、現状から一歩踏み出すきっかけをつくることとなります。また、ストレス場面におかれた時に適切に対処する力を身につけていくことにもなるので、人間関係を形成していく上で、重要な意味を持ちます。

事例

高等学校2年 男子 勉強で投げやりになり、担任のところに来た場面

A男：先生、今度のテスト、数学は捨てたから。全然解けないし、やる気なくす。

先生：そう。テストは来週だね。そんなに難しいんだ。

A男：範囲も広くて、どうせ勉強が終わらないし…。1学期まではできてたのにな。

先生：1学期はできてたよね。あの頃はどんな風に勉強していたの。

A男：授業に一応集中してたし、家でも問題集をやってました。

先生：今はどうしているの。

A男：最近は部活動で帰る時間が遅いから、勉強する時間があまりないんです。授業にもついていけなくて。このままじゃ、工学部に行けないですよ。

先生：工学部に行けない、と心配しているのかな。

A男：ええ。だって数学ができなくちゃ無理でしょ。

先生：今日、こうして話しに来たということは、何とかしたいという思いがあるからじゃないのかな。これから少し時間があるから一緒に考えてみようか。

事例におけるかかわりのポイント

A男には、最初投げやりな発言がみられますが、担任のところになんか話に来るといことは、心の中に何かしたいという気持ちがあるということに教師が気づくことが大切です。ここで表面的な言葉だけに反応し、「そんなことを言わないで頑張らないと」などと説教をして精神論を押し付けてしまうと、生徒が自分の心のもやもやを整理していくチャンスを逃してしまうことになります。

そこで、この例ではまず、「難しい」と感じ、投げやりになっている生徒の気持ちをよく汲んでいます。次の「どうせ終わらないし」という言葉からは、この生徒の焦りも感じ取れます。そこで、教師は1学期はできていたという本人なりの自信を大事にし、そこを手掛かりに「どうしてできていたのか」を聞いていきます。このように、気持ちを理解しながらも、「今はどうしているの」と事実を整理していきけるような問いかけをしています。

このように丁寧にかかわっていった結果、生徒の方から「工学部に行けないですよ」という核心の部分が言葉として出てきました。生徒自身が、今の焦りは心の中にくすぶっている進路に対する不安からくるものであることをはっきりと認識したわけです。

心の中が整理できたら、次は具体策と一緒に探っていきます。心情面だけでなく、行動面でも解決の糸口が見つけれられるよう、時間をとって話し合っていくと今後の学習に対する方針が見えてきて、部活動も含めた学校生活全体への取組が変化していきます。

(5) 子どもが納得いくかわり

子どもの行動が変わっていく

ありがちな会話

ぶつかったら「ごめんなさい。」を言わなくてはだめでしょう。

わざとぶつかったんじゃないもん。

ぼくはわるくない。
あやまりたくない。



わざとじゃなくても、
相手は痛かったんだから
謝りなさい。



かわりのポイント

子どもがとった好ましくない行動や態度に対して、すぐに叱りつけたり禁止したりしても、子どもは一応謝るものの、なかなか自分の行動を改めたり反省したりできないものです。そして、また同じような行動を繰り返すことになったり、次第に教師に対して反抗的な態度を取ったりするようになってくるのです。また、その不満が「いじめ」というかたちで友達に向けられたりもします。子どもの心を動かすには、まず子どもの気持ちを十分に受け止め、子どもが納得するように働きかけていくことが必要です。例えば子どもが「僕は悪くない」と言う時、「わざとじゃない」とか「自分だけが悪いとは思わない」など、その子なりの言い分があるわけです。まずその子どもの言い分を受け止めながら事実の確認をしていきます。その際には、自分から「謝りたい」という気持ちになるように、よく話を聞いていくようにします。このことで、子どもは自分の気持ちがわかってもらえたと感じて安心し、物事を冷静に考えることができるのです。

指示や命令、禁止だけでは子どもの心は動かせません。特に、命令だけでは、お互いの信頼関係を築くことも難しくなります。大切なことは、子どもが納得できるようなかわりをしていくことです。それは、子どもに自発的な行動を促すことになり、子どもの行動が変わっていくことになるのです。

事例

小学校2年 男子 休み時間に友達にぶつかり、トラブルになった場面

先生：どうしたの？

A子：B男さんがぶつかってきた。

先生：A子さん、大丈夫？

B男：わざとじゃないよ。早く外に遊びに行こうとしていてわからなかったんだよ。

先生：B男さん、急いでいたからA子さんに気がつかなかったんだね。

B男：うん。

先生：でもA子さん痛そうだよ。

B男：A子さん、ごめんね。

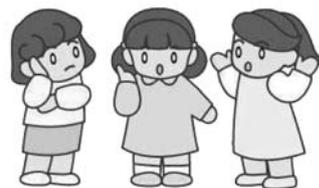
A子：うん、大丈夫だよ。

事例におけるかかわりのポイント

「〇〇がぶつかった」「〇〇がたたいた」と、子どもはよく訴えてきます。しかし、やった本人は何とも思っていないことが多いものです。「自分は悪くない」、むしろ「相手が～したから仕方がない」と思っている子も少なくありません。そんな状況で、「謝りなさい」「～しなさい」と指示しても、その子が納得しない限りはこちらが思うような行動はとらないものです。

ここでは、教師がトラブルに介入し、まずA子とB男の話を聞いています。A子は、B男がぶつかってきたことを教師に訴えています。教師はA子に、「大丈夫？」と声をかけ、けがはないかを確認しています。B男は、わざとA子にぶつかったのではなく単に早く遊びに行きたくて走った時に、ぶつかってしまったということを言っています。教師はB男の言葉を受け止め「急いでいたから」と言い換え、それをB男に確認しています。B男はここで、「わざとじゃない」ということが教師にわかってもらえたと思えるのです。それから教師は「A子は痛そうだよ」ということをB男に伝えていきます。そして、教師に指示されなくても、素直にA子に謝ることができるのです。

つまり、子どもの納得いくような言葉かけ、かかわりによって「自分から～しよう」という、自発的な行動に変わっていくわけです。



(6) 子どもを認め、励ますかわり

子どもは自己肯定感を高めることができる

ありがちな会話

最近、頑張りが足りないのよ。
しっかりしなさい。



そんなこともできないの。
やる気がないからだよ。



・・・(えっ！一応これでも
頑張っているんだよ。
やる気なくす。)



・・・(悪かったね、
どうせ何もできないよ。
いちいちうるさいんだ
よ。)



かわりのポイント

子どもの行為を認めたり、積み重ねた事実を十分に認めたりすることは、子どもにとって大きな励ましとなり、それは自信へとつながっていきます。つまり、子どもの性格、状況や背景を理解した上で、子どもの行為を肯定的に受け止め、やる気が出るような言葉をかけることによって、自己肯定感を高めることができるのです。

何かに取り組もうとする時、誰もがみんな必ずしも一生懸命に頑張れるとは限りません。なかなか気が進まず、やらなくてはいけないことを避けてしまい、その場から逃げてしまったり、後回しにしてしまったりすることもあるものです。そんな時、子どものできたところやよかったところ、そして今までやってきたことや努力を認め、温かい励ましの言葉をかけることで、子どもはこの先、よいイメージを持って、積極的に物事に取り組めるようになります。「もう、ここまでできた。すごいね」など、視点を変えたちょっとした言葉かけが、前向きな姿勢や考え方を促すことになり、子どもの気持ちが変わっていくのです。

また、自分のやることに自信が持てない子は、他の子と比べて劣等感を持っているため、おどおどしていたり、新しいことに取り組もうとする時、尻込みしてしまったりするものです。教師の「もっと自信を持って」という励ましの言葉は、子どもに、「叱られている」、「非難されている」と受け止められ、さらに自信を失わせることとなります。そんな時でもできていることや努力していること、よいことなどを具体的に認め、ほめていくことが大切です。

事例

中学校2年 男子 授業中ぐったりと机にうつ伏せになっていた生徒に、休み時間、廊下で声をかけた場面

先生：どうしたの。最近元気がなくて、疲れているようにみえるけど。

A男：別に。

先生：そうかな、なんか気になっていることでもあるのかな？

A男：全然勉強がわからないし、やる気ないんだよね。

先生：そうか、勉強がわからないんだね。

A男：それだけじゃないけど…。

先生：他にもあるんだ？もしよかったら話してみて。

A男：毎朝、部活の練習で疲れちゃっているんだよ。出ないと顧問に怒られるし。

先生：そうか、朝の練習も頑張っているんだ。結構きついんだね。

A男：うん、でも部活は好きだし…。

先生：本当に、部活も一生懸命頑張っているんだね。

事例におけるかかわりのポイント

授業中、姿勢が悪く、机にうつ伏せになっている子どもを見ると、教師は、ややもすると子どもに対して「やる気がない」と叱り、「もっとしっかりやるように」と注意しがちです。しかし、子どもが少しでも授業に前向きに取り組もうという気持ちになるためには、まず、今の状態になっているのはなぜなのか、その背景を理解しかかわっていくことが大切です。

ここでは、教師がいつもと違うA男の様子を見て感じたこと、また「どうしたのだろう？」と気になっていることをA男に率直に伝えていきます。そのことでA男は、自分が非難されたのではなく、自分のことを心配してくれていたんだとほっとした気持ちになるわけです。次に、教師が「気になっていることでもあるの」ということで、A男は少し話してみようかなという気持ちになり、さらに「もしよかったら話してみて」ということで具体的に話をしてみようかなという気持ちになっていきます。

このように無理に話をさせるのではなく、A男を尊重したかかわりをしていきます。さらに教師がA男の部活動での頑張りを認めることで、自分のことが分かってもらえたとA男は実感します。するとA男の問題が授業なのか、部活なのか、が少しずつ明確になっていきます。また自分の努力が認めてもらえたことで、自己肯定感も高まります。そして自分の問題が明確になった時、自分の行為を振り返り、これからのことについて考えることができるようになるのです。

本人の気持ちが少しでも変わっていくためには、行動そのものを批判するのではなく、その背後に隠された気持ちに関心を向け、できるだけ子どもを認め、励ますことが大切です。これによって、子どもは自信を持って、主体的に行動できるようになります。



4 まとめ

子どもが人間関係を築いていくために大切だと考えられる力として、自己を肯定できる力、「感情」に気づく力、表現する力、自己をコントロールする力、「聞く」力をあげました。これらの力を築く土台として大切なのが「安心感」です。

自分を受け入れてもらえる安心感、感情を表現しても大丈夫だという安心感、認めてもらえる安心感があるからこそ、子どもは、人と関係をもっていこうと思うのです。人間関係を築いていく中では、受け入れられる場合だけではなく、考え方が異なったり、意見が食い違ったりすることがあって当然です。その時に、子どもが、自分の意見を言いながらも相手の意見を聞き、そして、折り合える部分を探し結論を導いていく過程を経験しながら育っていけると、「人間関係は築いていくもの」であることを実感できるのです。また、同時に、いろいろな人とかかわっていこうとする気持ちも育っていきます。しかし、人間関係を築いていくことは容易ではありません。ですから、自分を受け入れてくれる安心感のある関係が土台にあることが重要なのは言うまでもありません。今、親子関係や友人関係において、この「安心感」が得にくくなっているのです。子どもを受け入れる立場の大人でさえも人間関係を築いていくことが難しいといえるのです。このような現実の中で、少しでも「安心感」が得られ、信頼関係が築けるような教師のかかわり方を具体的に述べてきました。

さらに、教師が子どもとかかわっていく時に考えていかななくてはならないことは、成長に合わせたかかわり方をするという視点をもっていることです。ここでは、子どもの成長に合わせてどのようにかかわっていったらよいのかを考えてみたいと思います。

(1) 人間関係の広がり

人間関係は一对一の関係から始まります。自分と親、自分と先生という二者関係の中で「受け入れられている」「分かってもらえる」という安心感が得られるようなかかわりが重要になります。

例えば、子どもが転んで痛みをこらえながら泣きべそをかいた時に、「痛かったね。よく泣かないで我慢したね。偉かったね」と、「痛かった」気持ちは受け止めながら、泣かないように我慢している気持ちも分かったことを伝えます。これによって子どもは、痛みも我慢も分かってもらえたと感じることができるのです。ともすると、大人が、痛くても「痛くない」ということが強い子だという意識を植え付けることがあります。しかし、痛みを感じることは自然であるので、それを受け止めてあげることが大切なのです。このように、痛い、悲しい、嫌いなどの感情であっても、それらを感じることは悪いことではなく、当然起こってくる感情であることを認めることが、その子の気持ちをまず受け止めることとなります。その感じたままを行動に移すかどうかの判断は必要になりますが、まずこうすることによって、子どもが、自分が感じたことをこの人になら安心して表現できるということを味わうことが大切なのです。その上、さらに、自分が痛みを我慢したことも認められることによって、このままの自分でいいのだという自信がついてくるのです。このようなことを積み重ねていくことによって、安心感を得て、さらに人間関係を広げていこうとする意欲が生まれてくるのです。

二者関係は、次に友人関係へと広がっていきます。今の子どもたちには、友達と意見が合わない場合、一方的に主張するか、または、言われるがままになるか、お互いに主張せずに当たり障りのない関係で過ごしていくかという状態が見られます。これは、異なる意見でも認め合える経験や、多少行き違いはあっても、人間関係は修復できるという経験がなく育っていることに関係しているのではないのでしょうか。

学校生活という集団生活を営む場においては、子ども同士の関係を醸成する経験を重ねていくことが大切になります。教師は、日常生活の中で意識的に子ども同士の関係に介入したり、見守りながら援助したりすることが必要になってきます。

(2) 発達に合わせたかかわり

人間関係の基盤が信頼できる大人との一対一の関係であるとすれば、まず、小学校低学年では、教師との一対一のことをしっかりとしたものにしていく必要があります。そして、友人関係が広がる中学年にかけては、子ども同士のトラブルを指導のチャンスと捉えて、教師が、お互いの言い分を聞いてそれぞれの思いを代弁したり、誤解がないようにそれぞれに話をしたりして、納得する結論を導いていく経験をさせていくことが有効ではないでしょうか。子ども同士のトラブルをけんか両成敗で終わりにしたり、自分たちで話し合っ解決させたりすることもあります。これでは、子どもが納得できる指導にはならず、また、何をどう話し合ったらよいのかもわからずに戸惑うことになってしまいます。わかりあえる経験を重ねることによって、人間関係は修復できることを実感できれば、友人関係が難しくなる高学年や中学校にうまくつなぐことができるのです。

小学校高学年から中学校にかけては、他人の目を気にするようになります。他人からどう見られているのかが大変気になり、自分が目立たないように、仲間から外されないように、周りに気を遣いながら学校生活を送っています。ですから、この時期は、他人の視線に配慮したかかわりが必要になります。ほめる時も、みんなの前で伝えることが本人にとって嬉しいことであるとは限りません。よいことであっても、個人的に伝えるのか、他の教職員や友達を介して伝えるのか、その子の性格や伝える内容や学級内の人間関係を考慮する必要があります。叱る時も、みんなの前で恥をかかせるような「見せしめの指導」は効果を上げるどころか、教師への信頼関係を失わせてしまうことになるのです。

高校生になる頃には、自分や他人のことを客観的にみることができるようになってくるので、人間関係においても、自分と相手の特徴を踏まえて関係の持ち方を考えていけるようになってきます。ですから、その子にあった人とのつきあい方を尊重し認めていくことが求められます。

しかし、まだまだ不安定な時期でもあるので、見守っていく必要があります。本人の求めに応じて援助していかなくてはなりません。

これまで述べてきたように成長過程において、安心できる二者関係や、せめぎ合う中でも分かり合える経験がないと、友達と深く信頼関係を築いていくことが難しくなります。人間関係につまずいた時は、もう一度教師との二者関係の中で、人間関係を再構築していくことによって安心感が得られ、再び人とかかわろうとする意欲が生まれてくるのです。

(3) 安心できる関係

現在、学校では、いじめや不登校が課題になっていますが、不登校の子どもの中には、友人関係のもつれや、いじめに関係した経験を持つことが少なくありません。このような場合は、人間関係の土台としての安心できる関係をつくり、「人」に対する信頼感を取り戻すことから始めることが必要なのです。

どのような場合であっても、先生は、自分のことを理解しようとしてくれる、受け入れようとしてくれるという安心感が、子どもの大きな支えになります。

教師と子どもの間に信頼関係が築かれ、子ども一人一人が安心できる学級やホームルームができると、子どもの人間関係に広がりが見られます。受け入れられていると感じている子どもは、相手の思いを聞くことができます。教師と子どもの安定した信頼関係が、今度は、子どもと子どもの人間関係を築いていく原動力となり、その子どもたちでつくる、学級やホームルームにおいても安心できる関係ができてくるのです。



〈引用・参考文献等〉

- ・教師だからできる 5分間カウンセリング 2004 吉本武史編著 学陽書房
- ・「引きこもり」から、どうぬけだすか 2001 富田富士也 講談社+α新書
- ・怒りをコントロールできない子の理解と援助 教師と親のかかわり 2005 大河原美以 金子書房

教育相談部発行資料

「学級・ホームルーム担任のための教育相談」

第1集	登校拒否児童生徒の理解と指導	(昭和63年度)
第2集	無気力な児童生徒の理解と指導	(平成元年度)
第3集	「緘黙」の理解と指導	(平成2年度)
第4集	登校拒否児童生徒の理解と指導(2)	(平成3年度)
第5集	いじめへの対応	(平成4年度)
第6集	事例研究のすすめ方—児童生徒理解のために—	(平成5年度)
第7集	不登校児童生徒の理解と指導	(平成6年度)
第8集	いじめへの対応(2)	(平成7年度)
第9集	学校教育相談の進め方—実践編(1)—	(平成8年度)
第10集	学校教育相談の進め方—実践編(2)—	(平成9年度)
第11集	気になる子の理解と対応	(平成10年度)
第12集	リストカット・自殺企図・摂食障害の理解と対応	(平成15年度)*
第13集	保護者との連携を深めるために	(平成16年度)*
第14集	キレる子どもの理解と対応	(平成17年度)*
第15集	いじめへの対応(3)	(平成18年度)*

調査研究報告書

- ・「望ましい学級経営の在り方」(中間まとめ) (平成11年度)
- ・「望ましい学級経営の在り方」(まとめ) (平成12年度)
- ・「不登校児童生徒の援助・指導の在り方」(中間まとめ) (平成13年度)
- ・「不登校児童生徒の援助・指導の在り方」(まとめ) (平成14年度)
- ・「中学校における発達障害のある生徒の指導の在り方に関する調査研究」(中間報告) (平成18年度)*

* 栃木県総合教育センターのホームページにて、閲覧及びダウンロードできます。

Webページ「とちぎ学びの杜」 <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>

あ と が き

本冊子は、人間関係を築く力を育てるために、学校で教師が子どもにどのようにかわっていかを具体的な場面をあげてまとめたものです。人間関係を築く力を育てるためには、教師と子どもの日々の信頼関係づくりが大切です。教師の温かい言葉かけやかかわりは子どもに安心感を与え、さらに教師や友達から認められたという体験は、子どもにとって大きな自信になっていくといえます。教師が、授業、特別活動、部活動等、学校生活のさまざまな場面で子どもに援助的な働きかけをしていくことは、人間関係を築く力を育てるために最も有効な手だてであると考えます。

限られた紙面の中ではありますが、できるだけ分かりやすい内容になることを基本方針に編集を進めました。今後、児童生徒一人一人が、個性や持っている力を十分に発揮し、生き生きとした学校生活が送れるようにするための参考としていただければたいへん幸いに存じます。

当総合教育センターでは、不登校やいじめ等のさまざまな児童生徒の問題についての教育相談を実施しています。また、学校からの児童生徒に関する相談にも応じていますので、是非とも教育相談部に御相談ください。

作 成 者

教育相談部

部長補佐 伊 澤 成 男

副主幹 赤 上 純 子

副主幹 潮 田 裕 子

指導主事 梅 澤 圭 子

指導主事 手 塚 幸 子

平成20年3月発行

学級・ホームルーム担任のための教育相談 第16集

「人間関係を築く力を育てるために」

発 行 栃木県総合教育センター

〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町 1070

TEL 028-665-7211

FAX 028-665-7212

あ と が き

本冊子は、人間関係を築く力を育てるために、学校で教師が子どもにどのようにかわっていかを具体的な場面をあげてまとめたものです。人間関係を築く力を育てるためには、教師と子どもの日々の信頼関係づくりが大切です。教師の温かい言葉かけやかかわりは子どもに安心感を与え、さらに教師や友達から認められたという体験は、子どもにとって大きな自信になっていくといえます。教師が、授業、特別活動、部活動等、学校生活のさまざまな場面で子どもに援助的な働きかけをしていくことは、人間関係を築く力を育てるために最も有効な手だてであると考えます。

限られた紙面の中ではありますが、できるだけ分かりやすい内容になることを基本方針に編集を進めました。今後、児童生徒一人一人が、個性や持っている力を十分に発揮し、生き生きとした学校生活が送れるようにするための参考としていただければたいへん幸いに存じます。

当総合教育センターでは、不登校やいじめ等のさまざまな児童生徒の問題についての教育相談を実施しています。また、学校からの児童生徒に関する相談にも応じていますので、是非とも教育相談部に御相談ください。

作 成 者

教育相談部

部長補佐 伊 澤 成 男

副主幹 赤 上 純 子

副主幹 潮 田 裕 子

指導主事 梅 澤 圭 子

指導主事 手 塚 幸 子

平成20年3月発行

学級・ホームルーム担任のための教育相談 第16集

「人間関係を築く力を育てるために」

発 行 栃木県総合教育センター

〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町 1070

TEL 028-665-7211

FAX 028-665-7212